



連載

# ビブリア・トーク

—私のオススメ—

→ 高橋ひとみ (日本アイ・ビー・エム (株))

## メ切本

夏目漱石, 谷崎潤一郎, 江戸川乱歩, 川端康成, 稲垣足穂, 太宰 治, 埴谷雄高, 吉田健一, 野坂昭如, 手塚治虫, 星新一, 谷川俊太郎, 村上春樹, 藤子不二雄<sup>Ⓐ</sup>, 岡崎京子, 吉本ばなな, 西加奈子ほか 著 (全 90 人)  
左右社 (2016), 368p., 2,300 円 + 税, ISBN : 978-4-86528-153-8



### メ切は誰でも辛い

メ切. この言葉が持つイメージは一般的に良くない. 聞いただけで動悸がする. 小学生の夏休みの宿題から始まり, 大学では卒論, 修論, 博論, 会社で働き始めてもプロポーサル, 特許提出など, 人生においてこのメ切という言葉はついてまわる. 中にはメ切と言われる日数のだいぶ前に物事を終わらせ, この言葉にドキドキを感じない方もいるとは思いますが, 私はメ切駆動形で物事を進める性分なため, メ切ギリギリまで何もしない. メ切の前にはなぜか余計な現実逃避を始め, 最後には仕事が進まない自分の平凡な才能を悲観する. 悲観する前に, 現実逃避をする前に, 何かを少しでも進め始めれば良いのだが, それができない性格であるようだ. そんなメ切がギリギリでもまったく邁進できない自分の才能や性格に悲観したとき, この本を読んでもらいたい. そして, 仕事が進まないのは自分だけではない, あんな著名な文豪も絶え間なる努力をしつつ, もがき苦しんでいたと分かってもらえれば幸いに思う.

### 本書の内容

本書は夏目漱石, 松本清張, 村上春樹など数々の文豪のメ切にまつわるエピソードをまとめた本であり, 内容は5部の構成になっている. ここで各章の概要を説明していきたい. まず, 「1: 書けぬ, どうしても書けぬ」では, 文豪のメ切に苦労する話を中心にまとめられており, 編集者へメ切を延ばしてほしい旨を集めた書簡や, 噂で耳にしたことがある缶詰 (作家にホテルなどへ宿泊してもらい, 原稿を進めさせる) にまつわる話など, なかなかどうして筆

が進まず苦しむ作家の姿がありありと分かる内容である. 次の「2: 敵か, 味方か? 編集者」は, 編集者にまつわる話となっている. 作家が編集者となった際の話, 良い編集者, 悪い編集者にまつわる対談やエッセイなどがまとめられている. 「3: メ切りなんかこわくない」では, メ切を守る作家がメ切について思うところをまとめている. 1章でさんざんメ切に苦しむ作家の姿を読んだため, この章と比較するとあまりにもギャップがあり面白い. もちろん, メ切を守る作家でも色々苦悩があるのが読み取れる. そして, 1章と比べるとページ数が圧倒的に少なく, メ切を守る作家の割合はやはり少ないのではないかと感じてしまう. 「4: メ切の効能・効果」ではなぜメ切を守れないのかを論じた話や, どうすればメ切が守れるのかなど, メ切の効果を論じた話がまとめられている. 最後に「5: 人生とは, メ切である」ではメ切を題材とした人生論やエッセイなどがまとめられている. この最後の章の最後の篇, つまり本の本当の最後に載っている話は非常に面白い. 衝撃なオチがついていた.

私がこの本で一番面白かった内容はやはり「1: 書けぬ, どうしても書けぬ」の章である. 本の多くのページを割いてあることからこの部分がやはりこの本のメインであると読み取れる. これを読んでいると「一四日にしめ切ると仰せあるが一四日には六づかしいですよ. 一七日が日曜だから一七八日にはなりませう」という内容がある. 木曜メ切の原稿を日曜か月曜までに延ばせないかと依頼する, ほぼ週末だから次の月曜まででもいいよね, というよく私でも使うメ切の延長依頼をかの夏目漱石がしてい

る。一方、「丁度一年だけ遅れる訳になりますが…」と一年メ切を延ばしてくださいとさらりと手紙で依頼する島崎藤村など、なかなか凄い依頼の書簡も見受けられる。また、メ切を延ばしてほしい理由を胃の調子が悪い云々と書いてある手紙も本章にはあり、とても短いがニヤニヤしてしまう内容となっている。運動会が嫌だから、親に仮病を使って休みたいと駄々をこねる子供を見ているかのような気持ちにさせられる。メ切ギリギリになっても、まったく原稿が進んでないにもかかわらず、資料の整理を試みたり、友人と飲みに行ったり、買い物に行ったり、と数々の文豪も私と同じようになぜか仕事を進めずに現実逃避を行う話や、「兵隊を整列させておいて「一」「二」「三」「四」…「十」まであって、それで十行。」など文章をどうやって長くするか、どうやって改行を増やすかなどを話した対談なども載っており、かなりの親近感を覚える内容もある。また、どの作家も原稿を書き上げた後に少し距離を置き、もう一度文章を推敲するという内容が多く、やはり、客観性を持って自分の原稿を読み直すことは重要だと思い知らされる。

この本では数々の文豪も私たちと同じようにメ切に追われ、苦悩し、必死になり、努力をして素晴らしい作品を生み出してきたのが垣間見られる。文豪の誰しもが非常に苦悩し、骨身を削って原稿を仕上げている。そんなあまたの苦悩をしていたという点では、有名文豪をととても身近に感じることができる本となっている。しかし、文豪の人々がそうなのだから、まして平凡な私にとっては、もっと努力をしなければ良い作品、仕事は生み出せないということも分かる。

## メ切との付き合い方

メ切は憎い存在であるが、存在しなければ仕事がまったく進まないことも事実である。私もメ切がなかったならば、やらない仕事がほとんどであろう。先延ばし、先延ばし、楽な方、楽な方に流れていきたい生来の怠け者である。そんな私に物事を進めさせてくれるメ切はとてもありがたい存在でもある。

「4:メ切の効能・効果」にある、外山滋比古氏の“のばせばおのびる、か”に「仕事をするのは気迫である」「今日できることがあったら、してしまえ。明日までのばすな。忙しい人は、すぐ手をつける」といった内容を参考に、本原稿執筆の依頼を受けてからすぐに執筆を始めてみた（この篇は論文についての記述もあり、それが非常に心に刺さる。ぜひ読んでほしい）。本原稿の締切は5月末であるが、執筆は4月中旬にはほぼ終わることができた。一度、原稿を寝かせて改めて読み直し推敲できる、十分な時間があるというわけだ。私には珍しく、メ切までの余裕を多分に感じており、今までのメ切のある仕事と比較すると、心の安定感がまったく異なる。すべての原稿とまではいかないが、こんな余裕のあるメ切との付き合い方を続けていけたらと思っている。

また、この原稿の始めに「メ切ギリギリで悲観したとき、この本を読んでほしい」と書いてしまったが、よく考えると本を読むより先に仕事を進めないときとまずい。メ切に余裕があるときぜひ読んでほしい本である。

(2017年5月12日受付)

高橋ひとみ（正会員） hitomi@jp.ibm.com

2008年慶應義塾大学政策・メディア研究科後期博士課程修了。博士（政策・メディア）。同年日本アイ・ピー・エム（株）入社。以降、クラウドの基盤技術に関する研究開発に従事。